利他の文明論

――道徳の科学的研究とグローバルな倫理の構築に向けて[1]――

犬飼　孝夫

目　次

はじめに
一　仏教における利他～「自他不二」の世界観
二　「自他不二」とミラーニューロン
三　利他と幸福～脳科学の成果から
四　利他をめぐる留意点
五　共感の拡大と「利他の文明」
六　多様性と利他
七　ファイサル・アブデュル・ラウフ～自我の没却
八　マチウ・リカール～思いやりの心
九　デイビッド・スタインドル＝ラスト～感謝生活
十　「地球倫理」の可能性
むすび

はじめに

仏教は自己と他者の関係性を「自他不二（じたふに）」という言葉でとらえ、他者に対する善行は、自己にも喜びと幸福感をもたらすと捉えている。このことは、いわゆる「ミラーニューロン」の発見によってより一層明らかになってきた。

本論文では、仏教の「自他不二」という言葉を手掛かりとして、さまざまな科学的研究の成果を紹介しながら、利他と幸福の関係性について論考したい。

また、イスラーム、仏教、キリスト教の分野で活躍している

現代の三人の賢者の言葉を吟味しつつ、諸宗教に共通する概念としての利他主義について論考し、それを地球倫理として位置づけることによって、利他の文明を構築していく可能性について論じたい。

一　仏教における利他～「自他不二」の世界観

仏教は利他の必要性を説いている。インド哲学者の中村元によれば「人間はもちろんのこと、一切の生きとし生けるものの幸せをめざすのが、ゴータマ・ブッダの願い」であった。ブッダは「一切の生きとし生けるものよ。幸福であれ、安泰であれ、安楽であれ」と願っていた[2]。

最初期の仏教以来、「他人に対する心的態度として、他人を尊重せよ、他人を軽視してはならぬ」ということが説かれてきた。後にシャカの前世物語として語られた『ジャータカ』においては、「互いに助け合うという精神」が強調されるようになった。このような思想を受けて、大乗仏教においては、利他が昂揚されることとなった[3]。

分子生物学の分野でフランスの国家博士号を持ち、細胞遺伝子の研究者として将来を嘱望されたのちに、ヒマラヤ山中で三十五年以上にわたり修行を続けている、フランス人チベット仏教僧マチウ・リカールは、「他者に幸福をもたらす行為は、自分の幸福を保証する究極的で最善の方策である」と述べている[4]。リカールによれば、仏教は親が感じるのと同じ親密さで心を配ることこそが真の利他であると教えている[5]。

仏教は、万物の存在を、すべてが相互依存関係にあるという大きな関係性の中で説いている。「人のためになることは善であり、人を害う（そこなう）ことは悪である」が、中村元によれば、ここで言う「人」は、他人のみならず「自分をも含めて考えて差し支えない」ものである。それは仏教の術語としては、「自他不二」と呼ばれているものであり、「他人と自分とは切り離せない」ということを意味している[6]。

中村元によれば、初期の仏教における道徳成立の基本は、「ひとは何人といえども自己を愛しているし、また愛しなければならぬ、という道理」に置かれていた。誰にとっても「自己よりもさらに愛しきもの」は存在しない。「同様に他の人々にもそれぞれ自己は愛しい。故に自己を愛する者は他人を害すべからず」、「自己を護る人は他の自己をも護る。それ故に自己を護れかし」ということが、原始仏教における自己と他者の関係性であった[7]。

このことについて中村は、「自己を護ることが同時に他人の自己を護ることでもあるような自己は、もはや互いに相対立し相争うような自己ではない。すなわち一方の犠牲において他方が利益を得るというような自己ではない。むしろ他人と協力す

ることによってますます実現されるところの自己である。自我の観念と他我の観念とを撥無し、無しと見なした場合に、〈自己の利〉が実現されるのである」と述べている。[8]

「自我の観念と他我の観念とを撥無し、無しと見な」すということは、自分の自己中心性すなわち「自我」を没却し、「他人と協力すること」によって、自他が共に〈自己の利〉を得ることができるということを意味していると言えよう。「慈悲の実現」とは、「自己と他人とが相い対立している場合に、自己を否定して他人に合一する方向にはたらく運動」であると中村元は述べている。それは、自他という区別を超越した、「無差別」を実現することであろう。[9]

中村元によれば、自他不二の思想は、特に大乗仏教において強調され、その実践理想となった。[10] このような自己と他者との関係性は「自他互融」とも呼ばれる。隋唐時代の天台宗は、実践的利他的行為を可能ならしめる根底としての理を「自他不二」とし、華厳宗は「一即一切、一切即一」を説いた。中国における浄土教においては「自他融即」の思想が基本的教説となった。中国南北朝時代の僧で中国浄土教の開祖とされる曇鸞は、「自ら利するによるが故に能く他を利す。自ら利すること能わずして他を利すること能うは非ざるなり、と知るべし」、「他を利するによるが故に能く自から利す。他を利すること能わずして能く自ら利するには非ざるなり、と知るべし」と説いている。[11] わが国の禅宗においても、慈悲の実践の成立する根拠を、「自他不二」の理に置いている。道元は「自他一如」を強調し、『正法眼蔵』の中で、「自他おなじく利するなり」と説いている。[12]

二　「自他不二」とミラーニューロン

さて、このような「自他不二」とは、自分が他人と同じ感覚を持つことができるということ、エンパシー（empathy）、すなわち「共感」ないしは「感情移入」と同義のものと言えるのではなかろうか。それは、いわゆる「ミラーニューロン」の発見によって、より一層明らかになってきた。大乗仏教でいう「自他不二」は、科学的にも証明されつつあると言えよう。

米国ジョージア州アトランタにある、ヤーキーズ国立霊長類研究センターの、リヴィング・リンクス・センター所長であり、エモリー大学心理学部教授でもあるフランス・ドゥ・ヴァールは、つぎのように述べている。「私たちは綱渡りを見ているとき、はらはらする、それは、曲芸師の体の中に自分が入り込んだような気分になり、そうなることで、彼の経験しているものを共有するからだ。私たちは彼といっしょにロープの上にいるのだ……。」[13] これは「共感」あるいは「感情移入」ということである。「私たちは、自分の外で起きることは何も感じら

れないが、無意識のうちに自己と他者を同化させることで、他者の経験が私たちの中でこだまする。私たちは、他者の経験をわが事のように経験する。このような同一化は、学習や連想、推論といった他のどんな能力にも還元できない……。共感は『他者の自己』に直結する経路を提供してくれる」とドゥ・ヴァールは述べている。[14]

ドゥ・ヴァールは、共感とミラーニューロンについて、つぎのように述べている。「誰かが苦しんでいるのを目にすると、痛みの回路が活性化し、私たちは歯を食いしばり、目を閉じるし、子どもが膝を擦りむくのを見たら『痛い！』と叫ぶことさえある。私たちの行動は他者の状況と一致する。その状況が私たち自身の状況になったからだ。[15]」ドゥ・ヴァールは続けて、「ミラーニューロンの発見は、この主張をそっくり細胞レベルで後押ししてくれる。一九九二年、イタリアのパルマ大学の研究チームが、サルが特殊な脳細胞を持つことを初めて報告した。その細胞は、サル自身が物に手を伸ばしたときばかりでなく、他者がそうするのを目にしたときにも発火するのだった。……こうしたミラーニューロンのどこが特殊かと言えば、それは、目にすることと実際にやることの区別がない点だ。ミラーニューロンは自他の境界を消し去る。そして、生物が周りの他者の情動や行動を真似るのを脳がどう助けるかについて、最初の手掛かりを与えてくれる。……ミラーニューロンの発見は、心理学にとって途方もない重要性を持ち、生物学におけるＤＮＡの発見に匹敵するものとして、非常に高く評価されてきた」と述べている。[16]

『モーラルブレイン―脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』（麗澤大学出版会、二〇一三年）によれば、今日の神経科学の研究は、「苦痛を感じている他者を観ただけで、自分自身の苦痛に関する動機―感情次元のコード化のための神経回路が反応する」ことを明らかにした。[17]「このような共有された神経メカニズムは、一人称の情報と三人称の情報の間に機能的な橋を架け、自他の同等性に基礎を与える」ものと言える。[18]

オランダ神経科学研究所の中心的存在として活躍しているクリスチャン・キーザーズは、ミラーニューロンについて「私たちの周りにいる人びとの行動や感情を、まるでその人たちが私たちの一部になったかのように『再現する』（mirror）」ものであると定義づけている。ミラーニューロンは、他者の行動のみならず、感覚や情緒までも映し出すものなのである。[19]

東京大学名誉教授の伊東俊太郎は、ミラーニューロンを「他者の意図や喜びや悲しみを自分が直接に理解するツールを与えるものである」[20]と定義づけ、そこに同情やエンパシー、共感・感情移入の本質があると述べている。私たちの脳には、他者を理解し共感する神経組織であるミラーニューロンが組み込まれているのである。伊東はそれが「道徳の根源」になっていると

論じている。私たちの脳には、生まれつき「社会的状況においていかに道徳的にふるまうべきかを観測し学習する」ツールが与えられているのであり、キーザーズによれば、「脳は倫理的であるようにデザインされている」のである。私たちはキーザーズのいう「直感的利他主義」(intuitive altruism) を、生まれながらにして身につけていると言うことができるだろう。[21]

このように、ミラーニューロンは言わば「自他の境界を消し去る」[22]ものなのであり、仏教で言う「自他不二」は、共感や感情移入という面で実現されていると言うことができよう。

三　利他と幸福～脳科学の成果から

さて、利他と幸福の関係については、さまざまな科学的研究がなされつつある。二〇一二年には、幸福をめぐる科学的研究を紹介したドキュメンタリー映画「ｈａｐｐｙ―しあわせを探すあなたへ」がわが国でも公開された。[23] その中でも紹介されている、米国ウィスコンシン大学マディソン校の心理学・精神医学教授である、リチャード・デイビッドソンによる瞑想の脳科学的分析は、特筆に値するものである。

リチャード・デイビッドソンが、先に紹介したマチウ・リカールをはじめとするチベット仏教の修行者を対象として行った、瞑想と脳の関係に関する実験結果は、二〇〇四年十一月に、アメリカの科学雑誌『米国科学アカデミー紀要』に「長期的瞑想の実践が脳におよぼす影響の研究」として掲載された。主にリカールが実験台となり、三十秒間の瞑想停止状態と、九十秒間の瞑想の状態が交互に繰り返され、その時の脳波の他に、機能的磁気共鳴画像法（ｆＭＲＩ）で、脳の血流状態が測定された。ｆＭＲＩは脳をめぐる血流を視覚化する画像法であり、脳の活性化した部分には血液が集まり充血した状態になるため、脳のどの部分が活性化しているか一目で分かるのである。[24]

実験には、「利他の愛と思いやり」、「精神集中」、「心の全開」、「心的イメージのビジュアル化」の四種類の瞑想が用いられた。[25] この実験の結果、リカールをはじめとする経験豊かなチベット仏教僧の場合、「思いやりの瞑想を開始するやいなや、左前頭前野の活動が異常に活発化する」ことが分かったのである。「思いやりの心」とは、他者の幸せに対する関心を示す感情活動、すなわち「利他の心」と言えよう。思いやりの心、すなわち利他の心を発揮すると、大脳皮質の左前頭前野が活性化することが分かったのである。また、脳のこの部位は、喜びや熱意などの「ポジティブな感情」を司る部位でもある。このことは、「利他」を行なうこと、すなわち、思いやりの心を発揮することによって、その当人にも「喜び」という「利」がもたらされていることを意味しよう。[26]

デイビッドソンとリカールらによる実験によって、「最も利

他的な人は、人生で最も高い満足感を享受する、という心理学者の研究を裏づける結果が得られた」のである。[27] このように、利他は幸せや喜びをもたらすということが脳科学的に立証されつつあると言えるだろう。

ちなみに、デイビッドソンは、これまでに一度も瞑想をしたことのない人たちに、とてもシンプルな瞑想を行わせるという実験も行っている。一度も瞑想をしたことがない人たちに、瞑想のトレーニングを二週間続けさせると、瞑想の熟練者とまではいかないまでも、それに準ずるほどの変化が彼らの脳に現れるのである。デイビッドソンは「人は心の働かせ方によって、自分の脳を意図的に変えていくことができる」と述べている。[28]

四　利他をめぐる留意点

さて、利他については、留意しなければならないこともある。まず、利他的行動は、誰かから強制されてやるべきではないということである。また、他人のためと思ってやったことが、結果的には「親切の押し売り」になってしまうこともある。そのような、押し付けがましい「親切」な行為は「自己志向的な利他」と言えるだろう。私たちは利他的な行動を起こす前に、自分の行動が、本当に他者を喜ばせるものになるのか、他者の役に立つことになり得るのか、よく考える必要があろう。

「利他」とは言っても、実際には、自分自身の気持ちのみを満足させるための手段になってはいないかどうか、常に自己を省みる、〈自己に反省する〉必要があるのである。自分の行いの道徳性をはかる重要な指針は「動機」である、とチベット仏教の指導者ダライ・ラマ十四世は述べている。ダライ・ラマ十四世によれば、「できるかぎり他人のためになろうと」すること、そしてまた、「自分の行動をいちいち確認しながら、その中身もできるだけよいものにしようと努めること」、「自分の行動がその場において、あるいは将来において、他人の幸せにつながっているかどうかを逐一考え」ることが重要なのである。[29]

また、利他的行為を生じさせる「共感」は、「私たち」(us)と「あの人たち」(them)という区分けを形成しやすいという点にも留意しなければならないだろう。「共感」には、「協力関係」を形成する場合と、「競争関係」を形成する場合があるからである。

先に紹介したドゥ・ヴァールは、「概して霊長類の心は、家族や友や協力関係にある相手の福利を気遣うようにできている」として、つぎのように述べている。「人間は、協力関係を結ぶ状況だと相手に共感するが、競争相手には『反共感的』になる。敵意をもって扱われると、共感とは反対の態度を示す。相手が微笑んだときに自分も微笑む代わりに、相手の喜びがま

るで気に障るかのように顔をしかめる。逆に、相手が苦しそうだったり悲しそうだったりすれば、相手の痛みから喜びをえているかのようにほくそ笑む。ある研究では、敵対的な実験者への反応が次のように記されている。『実験者の歓喜は不快感を生み、不快感は歓喜を生んだ』[30]。」

「私たち」と「あの人たち」という区分けの形成は、私たちの人間性の負の側面を示すものと言えよう。これをどのように克服していくかは、倫理道徳の問題となるのであろうが、基本的には、自分の内面性を常に「反省」し、「敵対する心」や「競い合う心」を失くしていくこと、自我、すなわち自分さえ良ければよいという自己中心性を没却することによって克服することが出来るのではなかろうか。

偏狭な「共感」に基づく排他的な「仲間意識」、すなわち「私たち」と「あの人たち」という区分けによってもたらされる不和は、一個人のみならず、社会や民族、国家といった集団レベルにおいても克服されるべきものである。ドゥ・ヴァールは、現代の国際社会が直面する最大の問題は、「自分の国や集団や宗教に対する過剰な忠誠心」であると指摘している。「人間は誰であれ外見や考え方の違う者には強い軽蔑を抱きうる」のであり、そのような例は、中東諸国をはじめ、日本・韓国・中国をはじめとする東アジア諸国においても見ることができよう。「私たち」のみならず「あの人たち」にも共感する気持ちが、世界の人々の心に不足しているのであり、世界人類の平和を実現するためには、「共感の及ぶ範囲」を広げていくことが重要なのである。

五　共感の拡大と「利他の文明」

「あなたが、あなたの家族が幸福な生活を送るためには、人類全体の幸福をまず考えるべきなのです。人類がなにかの問題に直面しているなら、人類の一員であるあなたがそれから逃れることはできません。自分を利したいと願うなら、まず他者の幸福を慮るべきなのです。こうしたことを教えることは可能なはずです。何かの宗教を信じようが信じまいが関係ありません。誰もが人類の一員なのです。」——これはダライ・ラマ十四世の言葉である[31]。

利他とは、「共感」と「協働」の輪を広げていくということであると言えよう。それは、個々人の、そして、社会全体の幸福度を上げていくことにつながる。そしてまた「利他」の「他」には、人間社会のみならず、自然環境・生態系も含まれよう。私たちは、地球資源を慎み深く利用・保全し、地球の自然環境を、次世代に受け渡していかなければならない。

私たちは、利他的な関係性の中で、共感と協働の輪を広げ、「個人の幸せ」(personal well-being)を、国家・国際社会の

「人びとの幸せ」（people's well-being）へと拡大していかなければならない。それと同時に、人間社会のみならず、地球環境と生態系をも利すること、すなわち「地球の幸せ」（planetary well-being）に、十二分に配慮することも必要である。私たちは、こうした包括的、かつ、多角的な視座を持ちながら、日々の暮らしの中で、ささやかな利他的・道徳的実践を通じて地球規模の幸福度を上げるべく貢献すべきであろう。それは、私たちの「子孫の幸せ」（posterity's well-being）をも実現することであり、将来世代のために、安定的・定常的な「利他の文明」を構築していくことを意味しよう。

　公益財団法人モラロジー研究所において長年にわたり研究部長を務めた大澤俊夫は、人間存在について、つぎのような言葉を残している。「私どもの後にはまた限りない人類の運命が続いております。私どもの子供が、子孫が、次の世代が続いております。私どもが真の自由人たるべく、独立人たるべく、本当に自分の生命をいとおしみ、社会に対していくばくでも報いるところあらんと念うのでしたら、私どもが現に享受している生活よりも、たとえ少しなりとも住みよい、平安な、幸せな社会を築きあげて、これを後代へ譲り渡していかなければならないでしょう。そして、先人への報恩と、後代への責任において、私どもの生活もまた真に生甲斐のある、豊かな人生となることでありましょう。[32]」

　現代世代の私たちが、地球環境と将来世代に眼差しを向け、利他的な行動を重ねていくこと。それこそが、今日の文明を築き上げた多くの先人たちの努力に報いる報恩となり、「先人たちの幸せ」（past generation's well-being）をも実現することになるのである。

六　多様性と利他

今日、人類社会は地球的規模の気候変動に直面しており、人為的な原因による「第六の生命大量絶滅の危機」に瀕しているとも言われている[33]。このような地球的規模の危機に直面している今、私たち人類が、地球環境と人類文明の持続可能性を実現するためにはどうすれば良いのだろか。

　二十一世紀の今日においても、各地で紛争が続いている。これらの紛争の背景には、宗教に基づく価値観の違いがあると言えるだろう。「宗教」を意味する英語 'religion' は、ラテン語の 'religare'（レリガーレ）に由来すると言われている。この言葉には「結びつける」という意味がある。各宗教は、その宗教を信仰する人々を一つの民族ないしは集団として束ね、団結させるという役割を果たしてきたと言えよう[34]。

　その信仰の結束力が強ければ強いほど、同じ信徒同士の絆は強まるだろう。だが一方で、それは往々にして異なる信仰を持

つ人々への排他性をも強めてしまうと言えるのではないだろうか[35]。

宗教や文化の多様性は尊重されなければならない。豊かな自然の生態系が生物多様性に満ちているように、宗教や文化の多様性は、人類社会に豊かな精神性をもたらすからである。しかしながら、宗教的価値観の「違い」が、人類社会に様々な対立と紛争をもたらしているとするならば、環境問題、人口問題、過激思想とテロといった地球規模の危機に直面する今日、私たちは、互いの宗教的価値観の「違い」を認めたうえで、その「共通性」にも目を向けるべきではないだろうか。今や私たちは、諸宗教の基盤に共通する概念、通底する価値観を見いだし、それを人類共通の倫理、「地球倫理」(global ethics) として打ち立てるべき時を迎えているのではないだろうか。

以下、イスラーム、仏教、キリスト教の分野で活躍している現代の三人の賢者の言葉を吟味しつつ、諸宗教に共通する概念を探り出してみたい。

七　ファイサル・アブデュル・ラウフ〜自我の没却

まず最初に、イスラームのイマーム（導師）としてニューヨークで活躍しているファイサル・アブデュル・ラウフの言葉を紹介したい[36]。

ラウフによれば、預言者ムハンマドは、信者に対し「神のようになりなさい」と教えており、アラーが第一に体現していることは慈悲であると言う。したがって、ラウフによれば、ムスリム（イスラームの信者）の「目標と使命は、慈悲を活発にし、慈悲を行動に移し、慈悲を話し、慈悲を施す者になること」である。

しかし、今日の世界において慈悲が不足しているとするならば、それはなぜなのだろうか。ラウフは「人類諸悪の根源はエゴイズム、『我』に起因している」とし「地球上にある慈悲はすでに与えられており、私たちの内にある。私たちはただ、エゴや利己主義を捨てれば良いのです」と述べている。

ラウフは「私の信仰の歴史から学んだこと」として、ある一つの「共通認識」を提示している。ラウフによれば「神は絶対的な存在、絶対的な認知、知識、知恵、絶対的な慈悲と慈愛の姿」として存在している。したがって、「人間であること、人間であることの最大の意味、人間であることの最大の喜びとは、私たち一人ひとりもまた、内にある神聖な息吹をつかさどり、その完全を目指して存在すること、生きること、ここにいること、また、知恵や意識や認知、そして、慈悲や慈愛を完遂すべく努力すること」である[37]。「内にある神聖な息吹をつかさどり、その完全を目指して存在する」とは、言いかえれば自己の「品性の完成」を目

指すということであろう。公益財団法人モラロジー研究所元常務理事の松浦勝次郎は、私たちは「心の修養をして品性を完成し、真の人間になるという究極の目的」を目指してしているのであり、「その目的のためには、人生の中で自分の身に起こることに無駄なことは何も」ないと述べている[38]。ここにはラウフの言葉と重なるものがあると言えよう。

ラウフがイスラームの信仰、そして、その他の信仰の歴史から学んだ共通認識とは、私たち一人ひとりが、自我すなわち利己心を没却すること、他者に対して寛大に接し、慈愛の心を発揮すべく努め、自己の品性の完成に向けて、心づかいと行動を改めるべく精進するということであろう。ラウフは最後に「この共通認識に私たちみんなが立っていなければなりません。そして私たちがこの基盤を中心とすれば、必ず素晴らしい世界を築くことができると信じています」と締めくくっている。

私たちは、互いの信仰や価値観、文化の「違い」を尊重しつつも、互いの「共通性」に目を向け、人間としての「共通の基盤」の上に立ち、今日の地球規模の難局に立ち向っていかなければならない。人類がそれぞれのエゴを押し通してこのまま対立と紛争を続けていくならば、人類も、地球の生態系も、第六の生命大量絶滅の波に押し流されてしまうことになるだろう。

八　マチウ・リカール～思いやりの心

つぎに、すでに紹介したフランス人チベット仏教僧マチウ・リカールの言葉を吟味しよう[39]。

リカールは「今や私たちは地球の限界のいくつかを大幅に超えてしまっています。生物多様性だけを見ても、今のペースでは二〇五〇年には地球上の全ての種のうち三〇％が滅ぶでしょう」と述べている。このような危機的状況の下で、人類は何をすべきなのだろうか。「環境問題が政治的、経済的、また科学的にいかに複雑であっても、それは利他性対利己性の問題に単純に還元できる」とリカールは答えている。

では、利他性とは何なのか。リカールによれば「それは『他の人々が幸せになり、幸せの源を見つけてほしい』という願い」である。利他性とは、これまでの自己と他者との関係性を捉え直すということであろう。そしてそれは、他者に対する共感と思いやりの心を基盤とするものなのである。

では次に、より利他的な社会を構築するためにはどうすれば良いのだろうか。「しなければならないことは二つです。個人の変化と社会の変化です」とリカールは答えている。では、個人の利他性を高めることはできるのだろうか。リカールによれば、答えは「イエス」である。リチャード・デイビッドソンと共に、利他性に関する脳科学的な研究を行ったリカールは、

「二千年にわたる瞑想研究によると、答えはイエスです。神経科学とエピジェネティクスによる十五年間の共同研究でも、答えはイエスです。利他性の訓練は脳を変化させます。……利他愛を抱くよう訓練した人には、脳の構造的・機能的変化が明らかに見られます」と述べている[40]。リカールによれば、瞑想や物事の見方や捉え方を変えていく訓練を積むことによって、利他性を高めるべく自分自身を変えることは可能なのである。

最後にリカールは、私たち一人ひとりがローカルな場面で貢献しつつ、グローバルな責任を果たしていくことが必要であり、さらに、利他性を他の人々のみならず、地球上の動植物すべてにまで広げていくことが重要であると述べている。

このようにリカールは、仏教の側面から、私たち一人ひとりが、利他性、すなわち、他者に対する思いやりの心、慈愛の心を広げていくことが大切であると説いている。利他性の核心となるものは、他者に対する思いやりの心、慈愛の心であろう。利他主義は、近代文明によって分断されてきた、人と人、人と自然、人の心と体を、慈愛の心で結び直す「絆の思想」と言えるのかもしれない。

さて、見返りを求めない利他は、結果的に自利をもたらすものと言えよう。大正十五（一九二六）年に、東西の諸聖人に共通する質の高い道徳（最高道徳）の実行とその効果を明らかにするための新しい学問として「モラロジー」（moralogy）を創建した廣池千九郎は、『道徳科学の論文』において「最高道徳の実行は自己の救済さるることに帰着す」[41]と述べている。これを受けて松浦勝次郎は、「最高道徳の人心開発救済は、いかなる場合にも、他者を助けることが自分が助かることとなり、自分が助かることが他者を助けること」につながるのであり、「利己と利他が調和し、一体のものとなって、相手にも第三者にも真の利益を与え、しかもその究極の結果として大いに自己自身を幸福にすることになる」もの、「まさに誰もが心から納得できる真の善事である」と述べている。利他によって自己に喜びがもたらされ、自己が喜びを得ることによってさらに利他が促進されるというように、自己と他者との間で〈善〉が循環する状況を実現すること。それが廣池の説く最高道徳における人心開発救済であると言えるのではなかろうか[42]。

九　デイビッド・スタインドル＝ラスト〜感謝生活

最後に、カトリック教会ベネディクト派の修道僧であるデイビッド・スタインドル＝ラストの言葉を見てみよう[43]。

スタインドル＝ラストは、幸福と感謝の心のつながりを重視している。「幸せをどのように考えるか。その考え方は違っても、幸せになりたいという気持ちは私たち皆が共有しているものなのです」とスタインドル＝ラストは述べている。「幸福」

とは、誰もが望む普遍的な目標であると言えよう。

では、人はどのような時に感謝の心を抱くのだろうか。多くの人が「人は幸せな時に感謝する」と答えるだろう。だがしかし、スタインドル＝ラストは「幸せな人が感謝しているというのは本当でしょうか?」と問うている。「幸せになるために全てを手に入れても、また別の物やもっと多くの物を欲しがるために、幸せでない人が大勢いる」一方で、「誰もが決して望まないような不運をたくさん背負っていながら、心の底から幸せな人たち」もいると、スタインドル＝ラストは言う。

不運を背負いながらも、心の底から幸せを感じる人がいる。それはなぜなのだろうか。スタインドル＝ラストによれば、それは彼らが感謝の心をもっているからである。「幸せが感謝をもたらすのではなく、感謝が私たちを幸せにしてくれるのです。もし、幸せが感謝をもたらすと考えているなら、考え直してください。感謝が、私たちを幸せにしてくれるのです」とスタインドル＝ラストは述べている。

スタインドル＝ラストが言わんとすることは、今というこの一瞬一瞬に生かされ、そして、生きていることに感謝すること、そして、たとえ困難な状況に置かれたとしても、それを恩寵的試練として感謝の心で受けとめ、前向きに立ち向かっていくことが大切であるということであろう。

松浦勝次郎は、廣池千九郎が「最高道徳実行の根本原理」の第三としている「自ら運命の責めを負うて感謝す」という格言をめぐり、「実際には、一般に幸福の条件とされていることに十分に満たされている人たちよりも、むしろ満たされていないと思える人のほうが、感謝の真の意味を知っていて、今を喜び、今に満足しています。人間は、幸せだから感謝するというよりも、感謝するから幸せなのです。誰もが、どのようなときにも、すべてを苦しみ、すべてに不満を持って不幸になることも、あるいは、すべてを喜び、すべてに感謝して幸せに生きることもできるのです」と述べている。松浦の言葉は、まさにスタインドル＝ラストの主張と重なるものと言えるだろう。[44]

「幸福」は万人が望むものであり、そのためには「感謝」の念をもって生きる「感謝生活」(grateful living) が重要であるとスタインドル＝ラストは述べている。このように「幸福」は「感謝」によって裏打ちされているものなのである。廣池千九郎も『道徳科学の論文』の中で「感謝的生活」ないしは「感謝生活」という言葉を何度か用いている。[45] この「感謝生活」は、文化や宗教を越えて万人が受け入れることのできる「普遍的な倫理」なのであり、現代社会において強調され、共有されるべき「地球倫理」であるとスタインドル＝ラストは論じている。

十　「地球倫理」の可能性

以上、イスラーム、仏教、キリスト教の分野で活躍している、現代の三人の賢者の主張を紹介した。彼らは、いずれも、自分の信仰を尊重しながらも、その枠を超えて、万人にあてはまる普遍的な教えを提示しているように思われる。

三人の主張には、「利己心の没却」「共感」「思いやりの心」「慈悲」「調和」「感謝」といったキーワードを見出すことができよう。これらは他者との関係性において発揮される徳目であり、「利他主義」という言葉で総括することができるのではないだろうか。そもそも、古来より、様々な宗教、思想・哲学が、「他人が喜ぶことをせよ」という教えを説いてきた。いわゆる「黄金律」と呼ばれるものである。黄金律とは、狭義には、新約聖書の「マタイによる福音書」第七章第十二節にある「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」、および、「ルカによる福音書」第六章第三十一節にある「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」という教えのことである。しかしながら、同様の慈悲、慈愛に基づき他者を尊重せよという教えは、他の思想・宗教にも多くみられるのである。[46]

このように「利他主義」は諸宗教に通底する概念であり、スタインドル＝ラストの言う「感謝生活」と共に、人類社会の「持続可能な調和」のために重要な、「地球倫理」（global ethics）の根幹を成すものであると言えよう。[47]

国連は二〇一三年九月に「世界幸福度報告書二〇一三」という報告書を公開した。[48] この報告書は、ギャラップ世界世論調査の二〇〇五年から二〇一一年にかけてのデータに基づいて、世界各国の幸福度を十点満点で評価したものであるが、「幸福を追求するうえで徳倫理学を回復すること」というタイトルが付けられているその第五章は注目すべきものであろう。この章では、ブッダやアリストテレスの思想・哲学、その他の伝統的諸宗教は、人間の幸福というものは個々人の物質的状況（富、貧しさ、健康、病）によってではなく、品性によって決まると教えてきた。だが、そうした教えは、一八〇〇年代以降の近代において、ほとんど失われた。幸福は物質的状況、特に収入と消費に結びつけられてしまったのであり、社会における幸福を高めるためには、「徳倫理学」に立ち戻ることが重要であると説いている。[49]

このように、今や国際社会は、人びとの「幸福」とその実現のために必須となる「徳目」に改めて注目しつつある。まさに今、諸宗教に通底する「徳目」を、万人にあてはまる普遍的な「地球倫理」として打ち出すことが求められていると言えるのではないだろうか。

むすび

世界の諸宗教は、他者を尊重し親切にせよという「黄金律」を説き、人々に道徳的な向上をうながして、個人と社会の幸福を実現することを目指してきた。

人類は今日、国家、宗教、文明といった枠組みで互いのエゴをぶつけあうのではなく、互いの精神性における〈違い〉を認め尊重しつつ、その〈共通性〉に目を向け、人類社会と地球環境の「持続的な調和」を実現すべき時を迎えている。宗教や文化の多様性を尊重しつつも、諸宗教に通底する徳目、すなわち「利他主義」を「地球倫理」として共有し、共感と思いやりの輪を広げていくことが二十一世紀の重要な課題なのである。

利他や幸福については、脳科学のみならず、動物行動学、ポジティブ心理学、道徳心理学などの分野においても研究が深まりつつある。[50]伊東俊太郎は、人間やサルの脳には「他者の意図や喜びや悲しみを自分が直接に理解するツール」とも言える「ミラーニューロン」が組み込まれており、他者を理解し、他者と共感することが可能なのであり、それが道徳の根源と言えると述べている。このことから、道徳は「宗教以前に成立して」いたと言うことができよう。[51]

人類の道徳的特性は進化の過程で自然に身についてきたものであって、伝統的な思想・哲学、宗教は、それらを言語を用いて「徳目」として体系づけ、より洗練させるという役割を果たしてきたと言えよう。人間が生得的に習得してきた道徳的・利他的な特性は、特定の宗教が独占的に創造してきたのではないし、それらは特定の宗教によって専有されているわけでもない。「権威ある絶対神が人間に道徳を授けた」のではないのである。[52]

人類が進化の過程で生得的に習得してきた道徳的・利他的な特性は、世界の諸宗教の基盤として、諸宗教に通底するものと言える。伊東の言葉を借りて表現するならば、そのような概念は、特定の宗教を背景とする概念はなく「全人類に対して、ヒトがヒトである限りにおいて成り立ち得る倫理」なのである。[53]

ダライ・ラマ十四世は「大多数の人が宗教を実践していない今、わたしはなんとかして、宗教に頼らずにすべての人間を救う方法を見つけたい」と述べている。[54]宗教と精神性の違いについてダライ・ラマは、「宗教というのは、そこで約束されている救済を信じること」であり、精神性とは「愛情や思いやり、我慢強さ、寛容さ、許す心、満足する心、責任感、協調性といった、自分だけでなく他人にも幸せをもたらす」「人間の称えるべき心のありよう」を示していると述べている。[55]彼はさらに、「こうした心のありようは必ずしも宗教とは関係がない。特定の宗教や抽象的な信仰に頼らなくても、人は十分にこうした心を育てられるはずである。……ほんとうに人間になくては

ならいのは、こうした基本的な精神性だと思う」と言い、「わたしたちは宗教に頼ることなく、道徳や倫理について語ることができるはずです」とまで述べているのである。(56)

文明史的な「変容の時代」を迎えている今日、生命・多様性・調和を尊重する立場から、利他や幸福をめぐる研究が学際的に展開され、その成果から、「地球倫理」、すなわち「ヒトがヒトである限りにおいて成り立ち得る倫理」が打ち立てられること、そして、それが広く人類に共有され、かつ、実践されることにより、地球生態系の保全と、人類の安心、平和、幸福を実現することが求められている。地球規模の環境破壊と「精神の砂漠化」に直面する人類にとって、「利他の文明」の構築は二十一世紀における危急の課題なのである。(57)

注

（1）本稿は平成二十七年一月二十四・二十五日に開催された平成二十六年度モラロジー研究発表会における発表原稿「利他性の幸福論」および、平成二十八年一月二十三・二十四日に開催された平成二十七年度モラロジー研究発表会と平成二十七年十二月十一日にベトナム・ホーチミン市にて開催されたベトナム国家大学ホーチミン市校国際シンポジウム「日本とベトナムの文化、融合と発展」における発表原稿「地球倫理としての利他主義～諸宗教に通底するもの」に加筆修正したものである。

（2）中村元『中村元選集［決定版］第一七巻　原始仏教の生活倫理』（春秋社、一九九五年）一四一頁。

（3）中村『中村元選集［決定版］第一七巻　原始仏教の生活倫理』一六三～一六四頁。

（4）マチウ・リカール著、竹中ブラウン・厚子訳『幸福の探求――人生で最も大切な技術』（評言社、二〇〇八年）三〇八頁。

（5）リカール『幸福の探求』二六四頁。

（6）中村元『〈生きる道〉の倫理』（春秋社、二〇〇五年）一七三頁。

（7）中村元『慈悲』（講談社学術文庫、二〇一〇年）九六～九七頁。

（8）中村『慈悲』九七～九八頁。

（9）中村『慈悲』一〇〇～一〇一頁。

（10）中村『慈悲』一〇一頁。

（11）中村『慈悲』一〇二頁。

（12）中村『慈悲』一〇二頁。

（13）フランス・ドゥ・ヴァール著、柴田裕之訳『共感の時代へ――動物行動学が教えてくれること』（紀伊國屋書店、二〇一〇年）九七頁。

（14）ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』九七頁。

（15）ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』一一五頁。

（16）ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』一一五～一一六頁。

（17）J・フェアプレツェ他著、立木教夫、望月文明監訳『モーラルブレイン――脳科学と進化科学の出会いが拓く道徳脳研究』（麗澤大学出版会、二〇一三年）一六〇頁。

（18）フェアプレツェ他『モーラルブレイン』一七一頁。

（19）クリスチャン・キーザーズ著、立木教夫、望月文明訳『共感脳――ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換』（麗澤大学出版

会、二〇一六年）一一頁。伊東俊太郎『変容の時代―科学・自然・倫理・公共』（麗澤大学出版会、二〇一三年）七九頁。

(20) 伊東『変容の時代』八〇頁。

(21) 伊東『変容の時代』八二頁。

(22) ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』一一五～一一六頁。

(23) この映画は二〇一一年にアメリカで公開された。原題は happy である。

(24) エレーヌ・フォックス著、森内薫訳『脳科学は人格を変えられるか?』（文藝春秋、二〇一四年）三一頁。

(25) リカール『幸福の探求』二四一頁。

(26) デイビッドソンとリカールのfMRIを用いた実験については、以下を参照のこと。シャロン・ベグリー著、茂木健一郎訳『「脳」を変える「心」―ダライ・ラマと脳学者たちによる心と脳についての対話』（バジリコ株式会社、二〇一〇年）三三七～三四四頁。

(27) リカール『幸福の探求』二四六～二四七頁。

(28) ベグリー『「脳」を変える「心」』三四四頁。リチャード・デビッドソン、シャロン・ベクリー著、茂木健一郎訳『脳には自分を変える「6つの力」がある。』（三笠書房、二〇一三年）一六七頁。

(29) ダライ・ラマ十四世著、塩原通緒訳『幸福論』（角川春樹事務所、二〇〇〇年）四七頁。

(30) ドゥ・ヴァール『共感の時代へ』二八六～二八七頁。

(31) ダライ・ラマ法王他『こころを学ぶ―ダライ・ラマ法王仏教者と科学者の対話』（講談社、二〇一三年）二三九頁。

(32) 大澤俊夫『師の心を求めて』（モラロジー研究所、二〇〇五年）一六～一七頁。

(33) エリザベス・コルバート著、鍛原多恵子訳『6度目の大絶滅』（NHK出版、二〇一五年）一五頁。

(34) ニコラス・ウェイド著、依田卓巳訳『宗教を生み出す本能―進化論から見たヒトと信仰』（NTT出版、二〇一一年）四～五頁。

(35) ウェイド『宗教を生み出す本能』一二頁。廣池千九郎は信仰に向き合う二つの態度について、以下のように述べている。「さて、一神を認めこれを信ずる点において、大体二種の態度があります。一は、全然他力的にして、ひとえに神を信じこれを礼拝するものであります。他は、根本においては他力的なるも、自力を排斥せざるものであります。すなわち前者は単に信仰的生活であり、後者は信念に基づく道徳的生活であります。」廣池千九郎『新版 道徳科学の論文』第七冊（広池学園事業部、一九八五年）二三九頁。

(36) イマーム・ファイサル・アブデュル・ラウフ「自我を捨て、慈悲を見つける」TED Salon 2009 Compassion, Filmed October 2009. このセクションにおけるラウフの発言は TED TALK からの引用。

(37) 松浦勝次郎『真に意味ある生きる道―「道徳科学の論文」に学ぶ』（公益財団法人モラロジー研究所、二〇一五年）一五六頁。

(38) 松浦『真に意味ある生きる道』一五六頁。

(39) マチウ・リカール「愛他性に導かれる生き方」TED Global 2014, Filmed October 2014.このセクションにおけるリカールの発言は TED TALK からの引用。

(40) エピジェネティックス（epigenetics）は「後成遺伝学」とも訳される。遺伝情報であるDNAの塩基配列（遺伝子）は、髪の毛や身長などの肉体的な特徴だけでなく、人格や感情などにも影響を与える。しかしエピジェネティックスの研究の進展と共に、遺伝子の作用はその人がどんな体験をしたかによって、生きているあいだ変

化し得ることが分かってきた。フォックス『脳科学は人格を変えられるか?』一八五頁。

(41) 廣池千九郎『新版 道徳科学の論文』第八冊（広池学園事業部、一九八五年）一八八頁。法学博士廣池千九郎（一八六六～一九三八）は、ソクラテス、イエス、釈迦、孔子など思想に通底する質の高い道徳を「最高道徳」と名づけ、そのような道徳的精神を学び、かつ、実践することが、個人の道徳性や品性を向上させ人類の幸福や世界の平和を実現する基礎であることを明らかにした。そして大正十五（一九二六）年に、最高道徳の実行とその効果を明らかにするための新たな学問として「モラロジー」（moralogy）を創建し、昭和三（一九二八）年に『新科学モラロジーを確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文』を出版した。

(42) 松浦『真に意味ある生きる道』一五六頁。井出元は、最高道徳の格言に関する廣池千九郎自身による解説文を以下のように紹介している。「最高道徳はいかなる場合でも、真に自分の助かる事、すなわち幸福になる事を目的とするので、他人とか、社会とかという事を眼中に置く事なしに、すべてを思考し、決断し、実行するのです。真に自分の幸福になる事ならば、他人と社会とは自分より前に、自分のために幸福を享くるようになっておるからです。……（廣池千九郎関係資料）」井出元『廣池千九郎の遺志』（公益財団法人モラロジー研究所、二〇一一年）二四〇～二四一頁。

(43) デヴィッド・スタインドル＝ラスト「幸せになりたいなら感謝しよう」TED Global 2013, Filmed June 2013. このセクションにおけるスタインドル＝ラストの発言はTED TALKからの引用。

(44) 松浦『真に意味ある生きる道』一二三、一三二頁。

(45) 廣池千九郎も『新版 道徳科学の論文』第八冊二〇〇頁、第八冊二二五頁、第九冊二八六頁で「感謝生活」という言葉を用いている。『新版 道徳科学の論文』第七冊一七四頁では「感謝的生活」という言葉を用いている。「感謝生活」という言葉は廣池の講演録『近世思想近世文明の由来と将来』（一九一五年）の中でも何度も用いられている。

(46) さまざまな宗教、思想に共通する黄金律については以下を参照のこと。ダライ・ラマ十四世テンジン・ギャツォ著、三浦順子訳『ダライ・ラマ宗教を語る』（春秋社、二〇一一年）一五八～一五九頁。

(47) 長年にわたりユネスコ本部で主席広報官などの要職を務め、現在は公益財団法人モラロジー研究所道徳科学研究センター顧問などを務めている服部英二は、「地球倫理」とは「人間と自然を切り離した近代以来の人間観と、それが創り出した『文明』に問題がなかったのかを問い、地球環境問題の底には究極的に倫理の問題がある、とするもの」であると述べている。服部英二『未来を創る地球倫理―いのちの輝き・こころの世紀へ』（公益財団法人モラロジー研究所、二〇一三年）一頁。

(48) John F. Helliwell, Layard Richard, and Jeffrey Sachs, eds. *World Happiness Report 2013*. New York: UN Sustainable Development Solutions Network, 2013.

(49) 徳倫理学をめぐる最近の文献としては以下のものがあげられる。フィリッパ・フット著、高橋久一郎監訳『人間にとって善とは何か―徳倫理学入門』筑摩書房、二〇一四年。加藤尚武、児玉聡編・監訳『徳倫理学基本論文集』勁草書房、二〇一五年。ダニエル・C・ラッセル編、立花幸司監訳『徳倫理学』春秋社、二〇一五年。

（50）道徳心理学の文献としては以下のものがあげられる。ジョナサン・ハイト著、藤澤隆史、藤澤玲子訳『しあわせ仮説―古代の知恵と現代科学の知恵』新曜社、二〇一一年。ジョナサン・ハイト著、高橋洋訳『社会はなぜ左と右にわかれるのか―対立を超えるための道徳心理学』紀伊國屋書店、二〇一四年。

（51）伊東『変容の時代』八一、八四～八五頁。ウェイド『宗教を生み出す本能』二一頁。廣池千九郎は『新版 道徳科学の論文』第三冊（広池学園事業部、一九八五年）一一〇頁「第二節 自己保存の本能及び道徳的本能」において、同情が「人間の道徳性の発達においては主要な役割を果たしてきた」のであり、人間が「他人の喜びや苦しみに反応出来るようになった」ことを指摘している。

（52）フランス・ドゥ・ヴァール著、柴田裕之訳『道徳性の起源―ボノボが教えてくれること』（紀伊國屋書店、二〇一四年）三〇九頁。パトリシア・S・チャーチランド著、信原幸弘他訳『脳がつくる倫理―科学と哲学から道徳の起源にせまる』（化学同人、二〇一三年）二八二～二八五頁。廣池千九郎は「凡そ人間は道徳的本能と利己的本能の二つを含む」と述べている。『モラロジー研究』七六号（二〇一五年一二月）「廣池博士の遺稿（一三）『別科卒業記念帖』」五七頁。また廣池は『新版 道徳科学の論文』第三冊一一〇頁において、人間が利己的本能と道徳的本能を有するというサザランド（Alexander Sutherland）の文献『道徳的本能の起原及び発達』（*The Origin and Growth of the Moral Instinct*, vol. 1. pp. 18-19.）から以下の部分を引用している。「われわれが所有しているものは、第一には、個体の保存に根本的に必要な一組の利己的本能である。第二には、その言葉の古くからの意味において私が道徳的と呼ぶ本能である。道徳的本能は同情を基礎とするものであって、集団あるいは種の保存のために、利己的本能の作用を抑制する役目を果たすのである。」

（53）伊東『変容の時代』七七頁。ダライ・ラマ十四世『幸福論』三四、四〇頁。マイケル・S・ガザニガ著、梶山あゆみ訳『脳のなかの倫理―脳倫理学序説』（紀伊國屋書店、二〇〇六年）二二二～二四一頁。

（54）ダライ・ラマ十四世『幸福論』三一頁。

（55）ダライ・ラマ十四世『幸福論』三四頁。

（56）ダライ・ラマ十四世『幸福論』三四、四〇頁。

（57）服部英二は、「地球の砂漠化は、人間の『精神の砂漠化』に由来する」と論じている。服部『未来を創る地球倫理』一八五頁。

（キーワード：自他不二、利他、脳科学、地球倫理）